

アトニニノ... 年度... 研究...

CA
01
05
60
RARY

アルゼンティン園芸総合試験場

平成7年度

試験研究成績概要書集

平成8年度

試験研究設計書集

JICA LIBRARY



J 1142936 (2)

平成8年7月

CR3



1142936 [2]

アルゼンティン園芸総合試験場 (CETFFHO) 中長期試験研究計画

1996.03.31 (1/4)

研究目標	研究課題			計画期間	備考
	大 課 題	中 課 題	小 課 題		
I. 花卉栽培体系の確立	1. 栽培技術改善 (対象とする花卉) 切花用花卉：カーネーション、キク、バラ、フリージア、トルコギキョウ、エリ類、アルストロメリア、グロリオサ、アザミ、シクラメン、ラン類、鉢花用花卉：アザミ、シクラメン、ラン類、ポインセチア他 2. 優良系統の選抜及び組織培養法による栽培技術の改善	1) 品種・系統に関する試験 2) 開花調節と作型開発に関する試験	a) カーネーションの新品種導入及び現地適応試験 b) 宿根カミツキの新品種導入及び現地適応試験 c) フリージアの新品種導入及び現地適応試験 d) トルコギキョウの新品種導入及び現地適応試験 e) エリ類、アルストロメリアの現地適応試験 f) グロリオサ、アザミの現地適応試験	1996 ~ 1998 1996 ~ 1998 1996 ~ 1998 1996 ~ 1998 1996 ~ 1998 1997 ~ 1999	
			1) 優良系統の選抜 2) 適正培地等の検索試験	a) アルゼンティン 国産の花弁類の育種試験 (バーバ、アルストロメリア、オアシユカ、バチエラ他) a) 切り花類の無病培養試験 (カーネーション、キク、ポインセチア 他) b) 鉢花類の大量増殖法培養試験 (シクラメン、ラン類、ポインセチア 他)	1999 ~ 2003 1996 ~ 2000 1996 ~ 2000
	3) 組織培養-手法の応用	a) DNA組換え技術の導入	1996 ~ 2005		

アルゼンティン園芸総合試験場 (CETFFHO) 中長期試験研究計画

(2/4)

研究目標	研 究 課 題			計画期間	備 考
	大 課 題	中 課 題	小 課 題		
3. 土壌環境の改善		1) 鉢花用標準培養土の作成	a) 培養土資材の特性調査	1997 ~ 1999	
			b) 標準培養土の組成の検討	1997 ~ 1999	
			c) 標準培養土適応試験	1997 ~ 1999	
4. 病虫害防除対策技術の改善		1) 病虫害防除に関する試験	a) カネシヨンの病虫害の診断と防除基準の検討	1996 ~ 1998	
			b) 木の病虫害の診断と防除基準の検討	1996 ~ 1998	
			c) 木の病虫害の診断と防除基準の検討	1999 ~ 2001	
5. 栽培施設・資材の改善		1) 新資材導入に伴う栽培試験	a) 底面給水法に関する試験(シクラン等鉢花)	1998 ~ 1999	
			b) ベンチ栽培に関する試験(パロクウール栽培等)	1998 ~ 1999	
6. ポスト・ハーベストに係る検討		1) 延命に関する試験	a) 培養土と養・水分管理に関する試験	1996 ~ 1998	
			2) セル成型苗生産システムの導入		
7. 遺伝資源探索		1) 延命に関する試験	a) 延命剤の効果試験	1995 ~ 1997	
			2) 包装・容器に関する試験	1996 ~ 2000	
			1) 遺伝資源の収集・保存	1996 ~ 2003	

アルゼンティン園芸総合試験場 (CETEFHO) 中長期試験研究計画

(3/4)

研究目標	研 究 課 題			計 画 期 間	備 考
	大 課 題	中 課 題	小 課 題		
II. 果樹栽培体系の確立	1. 新規導入果樹の栽培技術の改善	1) 品種適応試験 2) 台木に関する試験 3) 栽培密度に関する試験 4) 整枝・剪定に関する試験 5) 結実に関する試験 6) 土壌管理に関する試験 7) 果実貯蔵試験 8) 施設栽培に関する試験	a) 当初導入果樹8種類の品種適応試験 (ニホンナシ、ウメ、モモ、ブドウ、ウジ、カキ、リンゴ)	1986 ~ 2001	
			b) 改植果樹3種類の品種適応試験 (キウイ、グミ、カボチャ)	1995 ~ 2004	
			a) 当初導入果樹の矮性台栽培試験 (リンゴ)	1986 ~ 2001	
			a) 密植栽培試験 (リンゴ、モモ、ナシ、ブドウ、ウメ、カキ、ミカン)	1986 ~ 2000	
			a) 改植果樹3種類の並木仕立て試験 (ナシ、ミカン、カキ)	1992 ~ 2003	
			a) 鳥害虫防除試験 (ナシ、ブドウ)	1994 ~ 1996	
			b) 植物生長調整剤利用試験 (ブドウ)	1993 ~ 1996	
			c) 樹勢制御試験 (リンゴ、ウメ)	1994 ~ 1998	
		a) マルチと草生法試験 (ミカン)	1994 ~ 1998		
		a) 長期低温貯蔵試験 (ミカン、リンゴ、ナシ、カキ)	1994 ~ 1996		
		b) 脱渋処理試験 (カキ)	1995 ~ 1997		
		a) 促成栽培試験 (ハウスブドウ、キウイ)	1996 ~ 2000		
		b) 屋根掛け栽培試験 (リンゴ、ブドウ)	1996 ~ 2000		

アルゼンティン園芸総合試験場 (CETFFHO) 中長期試験研究計画

(4/4)

研究目標	研 究 課 題			計画期間	備 考
	大 課 題	中 課 題	小 課 題		
Ⅲ. 優良品質野菜の集約的栽培体系の確立	1. 栽培技術改善	1) セル成型苗システムの導入による栽培試験	a) 育苗試験	1996 ~ 1998	
	2. 土壌環境の改善	1) 土壌条件の不良に基づく生産力の低下とその対策 2) 土壌病虫害回避技術の改善	a) 養(有機物施用を含む)・水分管理に関する試験 b) 土壌の塩類集積対策 a) 太陽熱消毒法の検討	1998 ~ 1999 1998 ~ 1999 1997 ~ 1998	
	3. 栽培施設・資材の検討	1) ソイルレス・カルチャータの開発 2) 新作型の開発	a) ロックウール栽培試験 b) 養液栽培試験 a) イチゴの作型開発 b) レタスの作型開発	1998 ~ 2000 1998 ~ 2000 1996 ~ 1998 1996 ~ 1998	
	4. 病虫害防除対策技術の改善	1) 主要野菜の病虫害防除対策	a) トマト、キュウリ、ナス等の耐病性台木試験 b) トマト、ピーマンの病虫害防除試験 c) シルバーを利用したアブラムシ忌避 a) 包装・予冷・冷蔵・冷凍野菜の処理	1997 ~ 1999 1997 ~ 1999 1997 ~ 1998 1999 ~ 2000	
	5. 出荷・販売体制の改善	1) 収穫後の調整法の検討			

試験系総試験の試験研究実績と試験研究多岐計画

	平成4年度 試験成績書	平成5年度 試験設計書	平成5年度 試験成績書	平成6年度 試験設計書	平成6年度 試験成績書	平成7年度 試験設計書
不	日系花卉農家圃場で実施したものの(1課題)を平成5年度実施分(1課題)に加えたため、平成4年度として、報告・提出せず。 (専門家短期派遣) H4.12.14 ~ H5.3.4 ★5月グレイウ本場閉鎖決定	作成せず。	日系花卉農家圃場で実施した平成4年度分も含め、この度報告・提出。 (計2課題)	作成せず。	試験研究を行わなかったため、報告・提出せず。 (専門家短期派遣) H6.11.16 ~ H6.12.24	この度報告・提出 (4課題)
果	作成せず。しかしながら、試験成績結果を諸事情により、業務資料No.879「移住派遣農業専門家報告書(平成5年12月)」にとりまとめた (専門家長期派遣) H3.11.22 ~ H4.12.21	作成せず。	この度報告・提出。 (5課題)	この度報告・提出 (専門家長期派遣) H5.5.12	別途「移住派遣農業専門家報告書」として、当該専門家が帰国後、作成し、その中に記載予定。	この度報告・提出 H7.5.11
野	日系野菜農家圃場で実施した平成4年分を、平成5年度に継続実施(2課題)したので、平成4年分として、報告・提出せず。 (専門家長期派遣) H3.8.23 ~ H4.8.22	作成せず。	平成4年分を平成5年分に含め、この度報告・提出 (2課題)。	作成せず。	試験研究を行わなかったため、報告・提出せず。	この度報告・提出

研究目標： 花卉栽培体系の確立
 大課題： カネシヨンの栽培技術改善
 小課題： 病害虫の診断と防除基準の検討
 試験項目： カネシヨン病害虫の診断

アルゼンチン園芸総合試験場
 担当者： 安井公一、森重グニル

1995年度

目 的	<p>最近外国から新しい品種の苗が導入されており、それらが親株として使われているため、立枯性病原菌の有無が生産性に大きな影響を及ぼすことが考えられる。よってカネシヨンの主に萎凋細菌病および萎凋病についての防除基準作成の基礎材料を得るため本調査を行った。</p>
試 験 方 法	<p>1. <u>試料の採集</u>： 1995年12月5日から12月27日まで、ブエノスアイレス近郊のチブツカ地方において代表的な4戸の農家（2戸日本人、1戸ポルトガル人、1戸ボリビア人）から各品種それぞれ20本の苗を試料として採集。総試料数は820本であった。</p> <p>2. <u>病原菌の検出</u>： 7) <u>穂の滅菌</u>： 2-3cmに切った茎の両端をパラフィンで封じ、75%エチルアルコールで数秒間洗ったのち、1-2%次亜塩素酸ナトリウムに10分間浸漬し、高圧滅菌水で2回洗浄。 4) <u>切片テスト</u>： 表面を滅菌した茎の切片を無菌液体培地に投入。培地は、肉汁エキス10g、ペプトン10g、食塩1g、ブドウ糖10gを水1lに溶解し、煮沸後塩酸(1/5N)でpH7.0に調整。濾過後、試験管に20mlずつ分注し、120℃で20分滅菌。 クリンベックの下で、アルコールランプの炎で滅菌した針を用いて茎を約1mmの厚さに切り、2,3枚を試験管内の培地の中に落とし、滅菌したアルミホイルで試験管に蓋をして、30℃恒温器の中に置き、3-4日後に細菌および菌の増殖による培地の混濁と菌糸の伸長状態を検査。</p>
試 験 結 果	<p>1. <u>苗業者ごとの結果</u>： 調査した820本の試料を苗の入手先によって苗業者A, B, C（以上外国業者）、D（国内業者）と、自家生産苗1,2に分けて保菌率をみた。 第1表にそれぞれの調査本数、保菌本数と保菌率を示した。この表でわかるように平均保菌率は39.4%と高い値を示した。外国苗会社の保菌率を見ると、比較的低いB社の</p>

試験結果

25%からC社の75%まで分布していた。国内D社の保菌率は36%とほぼ平均値に近かった。自家生産苗1は一番保菌率が低く17.5%を示した。これは以前に当該試験場で生産した無病苗を親とした株であった。そして自家苗2は生産者が導入した苗から採った株で比較的高い率の42.6%を示した。

2. 導入後の株の齢と保菌率：

調査した試料のうち、株の齢の明らかな100本の試料を導入初年度と次年度の株に分けて保菌率をみた。第2表および第1図に結果を品種ごとに示した。5品種の平均保菌率に見られるように、初年は10%と比較的低い率であったが、次年度になると保菌率が45%にまで上がっていた。

考察

苗会社別の結果は生産者が導入した苗を圃場栽培に移してから調査を行ったため栽培管理の影響もあると思われる。できれば導入した苗を定植する前に調査した方がよいと思われる。現在栽培者は試験の形でいろいろな品種を導入しているので品種や導入先を選ぶとき保菌率も考慮する必要がある。そして自家苗を生産する場合も親株および苗の取り扱いについて病原菌に汚染されない注意が必要である。

株の齢ごとの保菌率で明らかなように、初年株は保菌率が低かったが、その後の農家の栽培によって保菌率が高くなる傾向が明らかであった。

ただ保菌苗の意味には注意する必要がある。すなわち保菌苗は必ず枯死する訳ではなく、発病は保菌状態や栽培管理などの環境条件によって左右され、特に夏の高温時期とか、根を痛めた時に発病が著しく枯死率が高まる傾向がある。

以上のことから絶えず無病苗と更新しながら用いることが重要ではあるが、実際栽培では汚染を皆無にすることは困難なため発病を誘発しないような管理に心掛けることも忘れてはならない。

主要成果の具体的なデータ

第1表： 苗業者ごとの保菌率

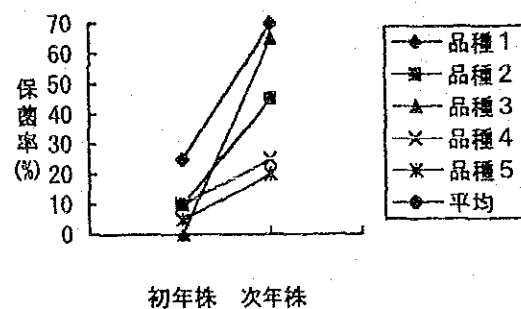
苗業者	調査本数 (本)	保菌本数 (本)	保菌率 (%)
自家生産苗1	40	7	17.5
自家生産苗2	380	162	42.6
外国苗A社	180	66	36.7
外国苗B社	60	15	25.0
外国苗C社	40	30	75.0
国内苗D社	120	43	35.8
合計	820	323	39.4

主
要
成
果
の
具
体
的
デ
ー
タ

第2表： 株の齢ごとの保菌率

品種	初年株			次年株		
	調査本数 (本)	保菌本数 (本)	保菌率 (%)	調査本数 (本)	保菌本数 (本)	保菌率 (%)
品種1	20	5	25.0	20	14	70.0
品種2	20	2	10.0	20	9	45.0
品種3	20	0	0.0	20	13	65.0
品種4	20	2	10.0	20	5	25.0
品種5	20	1	5.0	20	4	20.0
平均	20	10	10.0	20	45	45.0

第1図： 株の齢と保菌率



研究目標： 花卉栽培体系の確立
 大課題： その他の切り花の栽培技術改善
 小課題： 延命剤の効果試験
 試験項目： ポスト・ハーベストに関する試験

アゼンティン園芸総合試験場
 担当者：安井公一、森重ダニエル

1995年度

目的	<p>花卉類の市場価値を高めるためには、延命剤の使用が一つの方法である。しかしながら、未だ基礎データが無いので、その効果試験を行った。</p>
試験方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 供試場所： 農家(委託試験) 2. 種類： ゼラニウム (鉢物類) 3. 供試延命剤： Silver Thiosulphate (STS 8%を含む商品アゼンティンを使用) 4. 処理概要： <ul style="list-style-type: none"> ・濃度：STSとして濃度1 (0.1%)、濃度2 (0.2%) と濃度3 (0.3%) ・時期：1995年9月11日 ・方法： 株全体に散布 ・調査時期：1995年10月4日 ・調査項目：調査日における開花数、落花数 ・調査個体：1区制、各区20鉢 5. 栽培概要： <ul style="list-style-type: none"> ・苗：成型苗導入 ・定植期： 1995年5月10日 (12cm鉢) ・一般管理： 当地の一般慣行に準ずる
試験結果	<p>第1表および第1図に各処理濃度の平均落花率、変動係数、最高落花率と最低落花率を示した。</p> <p>試験した範囲内では対照区の平均落花率が一番高く56.3%であった、処理区は対照区に比べて平均落花率が低く、それぞれ0.1%濃度は21.7%、0.2%濃度は23.7%、0.3%濃度は29.0%の平均落花率を示した。</p> <p>第1表に明らかなように変動係数を見ると対照区が32.5%で処理区と比べて値が低く、濃度1は71.3%、濃度2は49.0%、濃度3は52.7%であった。</p>

考察
 ゼラニウムは落花し易い植物で7月20日には一番花が咲いてから出荷するのでこの現象が特に問題になる。これを防止するためには7月15日に延命剤を出荷の2週間前に散布すると有効である。

本試験の結果からいずれの処理区でも落花平均率が無処理に比べて低く、顕著な落花抑制効果を示した、濃度1と濃度2はほぼ同じで変動係数は0.2%区が低かった。

以上のことから実用的には、STS 0.2%の処理が個体間のばらつきが少なく、適当と考えられた。

一方、0.3%区でも障害は見られなかった。

第1表： 濃度ごとの平均落花率

	対照	濃度1	濃度2	濃度3
平均落花率(%)	56.3a ※	21.7 b	23.7 b	29.0 b
変動係数(%)※※	32.5	71.3	48.9	52.7
最高落花率(%)	87.0	56.0	61.0	65.0
最低落花率(%)	22.0	0.0	11.0	5.0

注1) ※ a, b (Tukeyのテストにより5%レベルで有意差のあることを示す)
 注2) ※※ 変動係数 = $\frac{\text{標準偏差}}{\text{平均}} \times 100$

第1図： 処理区と平均落花率

主
 要
 成
 果
 の
 具
 体
 的
 デ
 ー
 タ

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：病虫害防除対策技術の改善

中課題：主要野菜の病虫害防除対策

小課題：キュウリの耐病性台木試験

試験項目：キュウリの台木及び接木試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1995年度

担当者：仲間マリア、生駒エトル

目的	<p>キュウリを施設の中で連作していると、立枯病 (Fusarium Solani) に冒され、根腐れをおこすと共に収穫物は品質が悪化し、減収も著しく、栽培農家の大きな問題点となっている。</p> <p>この病気を避けるには、耐病性を有する台木に接ぎ木すると、ある程度は抑制出来るとの見通しがある。そのため当国内で得られるキュウリ用台木を3種類使用した栽培試験と、併せて接ぎ木方法の栽培試験を行なう。</p>
試験方法	<p>1. 供試品種： 台木：(1) Tetsukabuto (2) F₁ Sheiiper (Takii Seed) (3) F₁ Kirameki (Takii Seed) 栽培品種：Southern Delight (Takii Seed)</p> <p>2. 試験期間： 1995年12月~1996年4月</p> <p>3. 試験方法： (1) 播種：1995年12月17日、8cm のプラスチック鉢に播種 (2) 接ぎ木：1995年12月29日に寄せ接ぎを行ない、直後50ミクロンのポリエチレンを被覆して湿度を100%に保つ。 (3) 定植：1996年1月8日試験場の施設内へ定植して寒冷紗50%で被覆する (4) 栽植密度：畦幅1.20m、株間0.70m、1条植え 施肥量：N:P:K 18:46:0 温室6X40m 当たり3.6kg (5) 収穫期間：1996年2月下旬~1996年4月 (6) 処理区： a. F₁Kirameki + Southern Delight b. F₁Sheiipar + Southern Delight c. Tetsukabuto + Southern Delight 対照区 d. Southern Delight</p> <p>4. 試験場所：当試験場 カステラル 本場</p>

試

1. 発芽は順調に進んだが、台木の発芽が95年12月21日、栽培品種の発芽が95年12月23日と台木の発芽が栽培品種より2日早く、接ぎ木に手間取った。

*接ぎ木時には高温の日が続き管理が難しかった。

接ぎ木した苗の定植時の活着率を第1表に示した。

験

第1表接ぎ木した苗の定植時の活着率。

結

区	処 理 区		接ぎ木の 活着率(%)
	台 木 品 種	接 穂 品 種	
1	F ₁ Kirameki	+ Southern Delight	43
2	F ₁ Sheiper	+ Southern Delight	64
3	S ₁ Tetsukabuto	+ Southern Delight	14
4	Southern Delight (対照区) (接ぎ木せず)		

果

及

び

2. 接ぎ木した1区、2区、3区は接ぎ木の活着率が低く、また成育も遅れて、苗が弱かった。対照区は生育が良く順調に育った。

今後さらに接ぎ木方法などに検討を加える必要がある。

考

3. キュウリ台木栽培試験は継続中(報告書提出は次年度)。

察

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立

大課題：新規導入果樹の栽培技術改善

中課題：結実に関する試験

小課題：樹勢制御試験

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲、イグレスス・ゴッサーロ、

1995年度

中島芳和

目 的	バラデーロ圃場のウメ園では、未だ栄養生長盛んで結実率がきわめて低い。これらのウメに対して、主幹を針金で絞め樹勢を制御し、生殖生長に移行させる。																													
試 験 方 法	花芽分化期の2-3ヶ月前に地上約30cmの位置に主幹を直径2.5mm程度の針金で絞める。針金は樹皮に食い込ませそのまま放置する。																													
結 果 及 び 考 察	針金で絞めた区が取量でやや対照区より多かったが、今年は晩霜被害のため落果数多く、データ不足となったため次年度も継続して調査の予定。																													
具 体 的 デ ー タ	<table border="1"><thead><tr><th colspan="2">調 査</th><th colspan="2">対照区</th><th colspan="2">針金で絞めた区</th></tr><tr><th>時期</th><th>区</th><th>調査数</th><th>数 量</th><th>調査数</th><th>数 量</th></tr></thead><tbody><tr><td>8月下旬</td><td>結果枝(1.5m)</td><td>4本</td><td>着果数：38ヶ</td><td>4本</td><td>着果数：42ヶ</td></tr><tr><td>11月中旬</td><td>1樹平均</td><td>26本</td><td>収量：3.8Kg</td><td>39本</td><td>収量：4.3Kg</td></tr></tbody></table>						調 査		対照区		針金で絞めた区		時期	区	調査数	数 量	調査数	数 量	8月下旬	結果枝(1.5m)	4本	着果数：38ヶ	4本	着果数：42ヶ	11月中旬	1樹平均	26本	収量：3.8Kg	39本	収量：4.3Kg
調 査		対照区		針金で絞めた区																										
時期	区	調査数	数 量	調査数	数 量																									
8月下旬	結果枝(1.5m)	4本	着果数：38ヶ	4本	着果数：42ヶ																									
11月中旬	1樹平均	26本	収量：3.8Kg	39本	収量：4.3Kg																									

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立

大課題：新規導入果樹の栽培技術改善

中課題：結実に関する試験

小課題：樹勢制御試験

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲、イグナシオ・インサロ、

1995年度

中島芳和

目 的	バラデーロ圃場のウメ園では、まだ樹齢が若く、栄養生長盛んなため、結実率が極めて低い。そこで樹勢を落ち着かせ、結実を向上させる徒長枝の剪定方法及び時期について試験した。
試 験 方 法	供試品種：鶯宿・玉英・白加賀・南高 試験区：1 夏季強剪定：94年12月実施 20樹 2 夏季弱剪定：94年12月 〃 15樹 3 冬季強剪定：95年6月 〃 15樹 4 冬季弱剪定：95年6月 〃 12樹 調査日：95年11月中旬に収穫し1樹平均重を測定した。
結 果 及 び 考 察	1樹当たりの収量は、2の夏季弱剪定で最も多く、次いで3の冬季強剪定、4の冬季弱剪定、1番少ないのが1の夏季強剪定であった。この結果、夏季の樹勢の強い若木に対しては、強い剪定は避けた方が増収を期待できると推測できる。ただし、9月19日の晩に霜害が発生したので引き続き次年度も継続して調査の予定。

具
体
的
数
据

試 験 区	1	2	3	4
平均収量 (Kg)	2.8	6.0	5.9	3.2

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立

大課題：新規導入果樹の栽培技術改善

中課題：品種適応試験

小課題：当初導入果樹8種類の品種適応試験（ウメ）

アルゼンティン園芸総合試験場

1995年度

担当者：樽谷政憲, イリソナス・イサーロ

目的	バラデーロ圃場で収穫したウメ果実の収量及び品質を調査した。																																
材料及び方法	1986年に栽植した南高、鶯宿、白加賀及び玉英を調査した。 収穫日： 南高：11月15日 玉英：11月17日 白加賀、鶯宿：11月18日 果汁の糖度：屈折糖度計で測定																																
結果及び考察	開花も結実も良好であったが、9月19日の晩霜により多数の樹でほとんどの実が落果した。被害をのがれた果実は各品種共大果になった。果重では鶯宿が43.3gで1番大きく、玉英41.0g、白加賀38.1g、南高28.0gとなった。1樹平均収量では南高が1番多く10.5Kg、玉英5.3Kg、鶯宿3.2Kg、白加賀2.8Kgとなった。																																
具体的データ	<table border="1"><thead><tr><th>品種名</th><th>調査本数</th><th>平均収量</th><th>平均果重</th><th>糖度</th><th>備考</th></tr></thead><tbody><tr><td>鶯宿</td><td>23</td><td>3.2</td><td>43.3</td><td>7.0</td><td rowspan="4">単位： 平均収量：Kg 平均果重：g</td></tr><tr><td>玉英</td><td>24</td><td>5.3</td><td>40.0</td><td>7.5</td></tr><tr><td>白加賀</td><td>23</td><td>2.8</td><td>38.1</td><td>7.8</td></tr><tr><td>南高</td><td>26</td><td>10.5</td><td>28.0</td><td>7.4</td></tr></tbody></table>						品種名	調査本数	平均収量	平均果重	糖度	備考	鶯宿	23	3.2	43.3	7.0	単位： 平均収量：Kg 平均果重：g	玉英	24	5.3	40.0	7.5	白加賀	23	2.8	38.1	7.8	南高	26	10.5	28.0	7.4
品種名	調査本数	平均収量	平均果重	糖度	備考																												
鶯宿	23	3.2	43.3	7.0	単位： 平均収量：Kg 平均果重：g																												
玉英	24	5.3	40.0	7.5																													
白加賀	23	2.8	38.1	7.8																													
南高	26	10.5	28.0	7.4																													

研究目標：果実の栽培技術体系の確立

大課題：新規導入果樹の栽培技術改善

中課題：品種適応試験

小課題：当初導入果樹8種類の品種適応試験（モモ）

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲・カンサロ・イグリアス

1995年度

目的	<p>パラデーロ圃場で試験栽培しているモモは日本種の白色系で未だアルゼンティン国では普及していないが、美味しさは在来系、欧米系の黄桃に較べ優れている点市場性もあると考えられる。品質に問題がなければ栽培普及させたいので品質検定のための基礎データを得る。</p>
材料及び方法	<p>供試品種：早乙女、砂子早生、松森早生、白鳳 果汁の糖含量：屈折糖度計で測定。 有機酸含量：0.1 N NaOH 溶液を用いた滴定 酸度法で行いクエン酸に換算して求めた。</p>
結果及び考察	<p>果重については白鳳が最大重を示し 252g、砂子早生の 239.1g、松森早生の 221 g、早乙女の 153.2g の順であった。特に、早乙女は果実が小さく、見栄えがしないため普及品種としてはやや問題があるように思われる。</p> <p>白鳳、砂子早生、松森早生は、果重と大きさに問題なく、加えて食味も良い点普及品種として期待出来ると思われるが、糖度・酸度以外の品質（果肉硬度・着色度等）についても調査を行う必要がある。</p>

結
果
及
び
考
察

ところで、昨年度の生育が非常に悪かったため、ヒマワリ殻入り鶏ふん「約40L」と黒土「100L」を混ぜた腐植土を各樹毎に入れ、また畝を自然傾斜方向に切り変えたため雨天の際にも滞水しなくなり、これ等が要因で、樹が見違える程良く生育し、昨年度に比較し品質（糖度・酸度など）も良くなったと推察される。

試
験
成
果
の
具
体
的
デ
ー
タ

区分	収 穫 日	重量 (G)	糖 度	酸 度 %	備 考
早乙女	1995年12月2日	153.2	12.1	0.25	
砂子早生	1995年12月12日	239.1	11.3	0.21	
松森早生	1995年12月23日	221.0	12.0	0.26	
白 鳳	1996年 1月 4日	252.0	13.7	0.20	

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立

大課題：栽培環境に関する試験

中課題：防風林に関する試験

小課題：霜害に関する試験

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲、イグナシオ・インサロ、

1995年度

中島芳和

目的	<p>パラデーロ圃場のウメ試験区の周辺はユーカリの防風林があり、この防風林による防霜効果もあるか否かを調査した。</p>																																												
結果及び考察	<p>防風林から8mに位置する玉英の収量は7Kg、36.8mに位置する同品種の収量は1.4Kg、その収量比は5:1であった。南高も12m-13.9Kgと26.6m-2Kgで約7:1、白加賀では16m-4.7Kgと59m-1.9Kgで約2.5:1となったので防風林の高さ「約20m」と同程度の距離にある梅樹はこの防風林により霜害が低減したと考えられる。なお、湿潤パンパ地帯の平坦地に立地する果樹園では、防風林は防風効果のみならず防霜効果も兼ねていると考えられており、この度の調査結果からも、防風林は必要と思われる。</p>																																												
試験成績の具体的なデータ	<table border="1" data-bbox="344 1361 1289 2011"> <thead> <tr> <th data-bbox="344 1361 555 1541">区分</th> <th data-bbox="555 1361 651 1541">玉英</th> <th data-bbox="651 1361 738 1541">南高</th> <th data-bbox="738 1361 831 1541">白加賀</th> <th data-bbox="831 1361 924 1541">鶯宿</th> <th data-bbox="924 1361 1016 1541">南高</th> <th data-bbox="1016 1361 1109 1541">玉英</th> <th data-bbox="1109 1361 1201 1541">鶯宿</th> <th data-bbox="1201 1361 1289 1541">白加賀</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="344 1541 555 1720">防風林からの距離 (m)</td> <td data-bbox="555 1541 651 1720">8</td> <td data-bbox="651 1541 738 1720">12</td> <td data-bbox="738 1541 831 1720">16</td> <td data-bbox="831 1541 924 1720">20</td> <td data-bbox="924 1541 1016 1720">26.6</td> <td data-bbox="1016 1541 1109 1720">36.8</td> <td data-bbox="1109 1541 1201 1720">48</td> <td data-bbox="1201 1541 1289 1720">59</td> </tr> <tr> <td data-bbox="344 1720 555 1839">調査本数</td> <td data-bbox="555 1720 651 1839">6</td> <td data-bbox="651 1720 738 1839">10</td> <td data-bbox="738 1720 831 1839">10</td> <td data-bbox="831 1720 924 1839">9</td> <td data-bbox="924 1720 1016 1839">16</td> <td data-bbox="1016 1720 1109 1839">18</td> <td data-bbox="1109 1720 1201 1839">14</td> <td data-bbox="1201 1720 1289 1839">13</td> </tr> <tr> <td data-bbox="344 1839 555 2011">1樹当たりの収量 (Kg)</td> <td data-bbox="555 1839 651 2011">7</td> <td data-bbox="651 1839 738 2011">13.9</td> <td data-bbox="738 1839 831 2011">4.7</td> <td data-bbox="831 1839 924 2011">2.3</td> <td data-bbox="924 1839 1016 2011">2.0</td> <td data-bbox="1016 1839 1109 2011">1.4</td> <td data-bbox="1109 1839 1201 2011">2.0</td> <td data-bbox="1201 1839 1289 2011">1.9</td> </tr> </tbody> </table>									区分	玉英	南高	白加賀	鶯宿	南高	玉英	鶯宿	白加賀	防風林からの距離 (m)	8	12	16	20	26.6	36.8	48	59	調査本数	6	10	10	9	16	18	14	13	1樹当たりの収量 (Kg)	7	13.9	4.7	2.3	2.0	1.4	2.0	1.9
区分	玉英	南高	白加賀	鶯宿	南高	玉英	鶯宿	白加賀																																					
防風林からの距離 (m)	8	12	16	20	26.6	36.8	48	59																																					
調査本数	6	10	10	9	16	18	14	13																																					
1樹当たりの収量 (Kg)	7	13.9	4.7	2.3	2.0	1.4	2.0	1.9																																					

1995年の気象 期間 : 1995年1月~12月
観測地 : バラデー口果樹園場

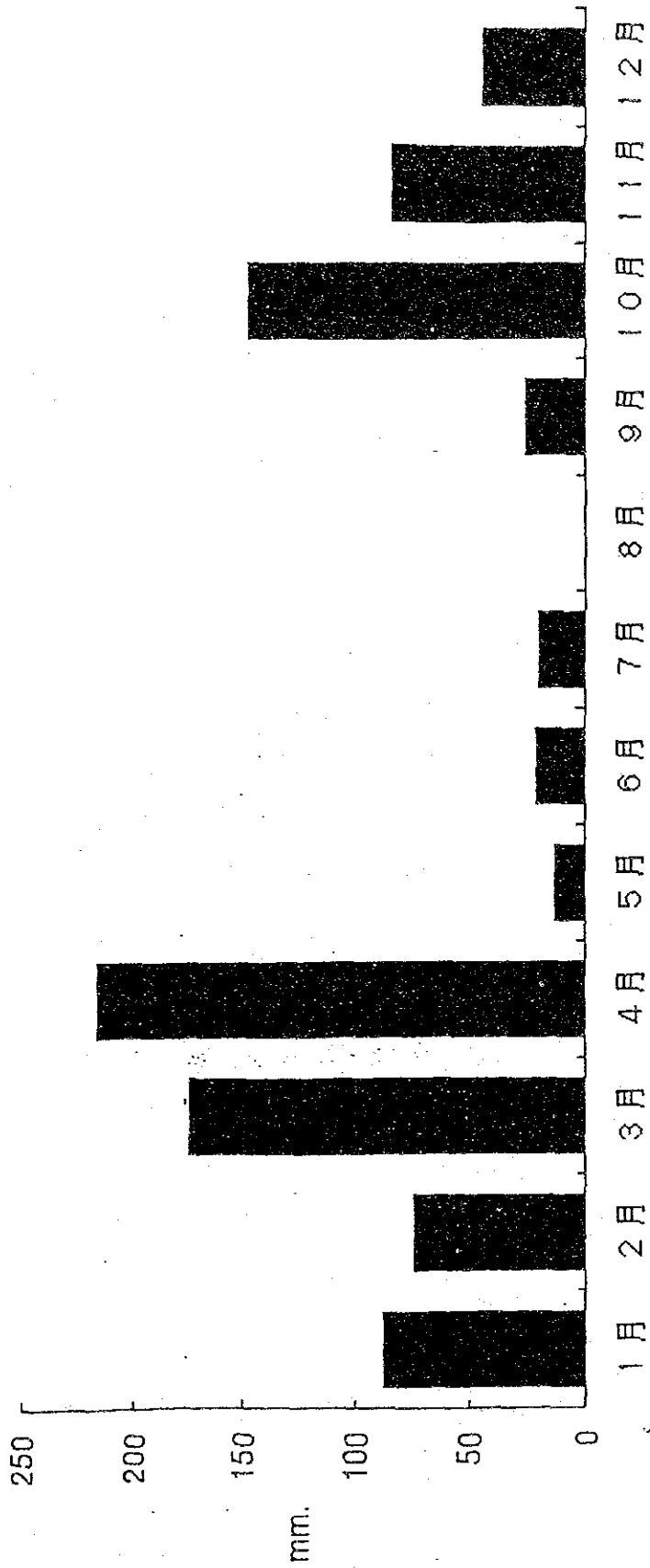
月	旬	気 温			雨量 積算	降霜 日数	月	旬	気 温			雨量 積算	降霜 日数
		最高	最低	平均気温					最高	最低	平均気温		
1	1	38.8	11.0	24.7	56.0	0	7	1	18.6	-1.6	8.5	0.0	6
	2	35.5	13.5	24.0	12.0	0		2	16.1	-5.0	6.0	11.3	5
	3	33.0	14.5	24.5	20.0	0		3	20.0	-3.0	8.6	8.7	4
	月	35.7	13.0	24.4	88.0	0		月	18.2	-3.2	7.7	20.0	15
2	1	33.9	14.9	25.3	24.5	0	8	1	17.1	-5.5	6.4	0.0	6
	2	33.5	10.5	24.2	38.4	0		2	17.8	-2.2	7.8	0.0	4
	3	32.0	13.2	22.6	11.0	0		3	27.2	-1.4	13.5	0.0	0
	月	33.1	12.8	24.0	73.9	0		月	20.7	-3.0	9.2	0.0	10
3	1	32.1	7.0	19.9	98.0	0	9	1	30.0	-0.5	14.3	7.0	1
	2	32.6	11.0	22.5	10.0	0		2	23.6	-3.0	11.0	9.5	3
	3	32.0	12.0	21.8	67.0	0		3	23.5	2.6	12.8	8.9	0
	月	32.2	10.0	21.4	175.0	0		月	25.7	-0.3	12.7	25.4	4
4	1	29.8	10.0	19.5	142.5	0	10	1	22.5	4.0	14.1	105.0	0
	2	25.8	5.4	15.3	5.6	0		2	25.2	2.8	12.9	43.2	0
	3	25.5	4.8	15.9	69.0	1		3	31.2	4.5	18.0	0	0
	月	27.0	6.7	16.9	217.1	1		月	26.3	3.7	15.0	148.0	0
5	1	26.0	6.4	15.9	0.0	0	11	1	34.0	11.5	22.1	73.2	0
	2	23.4	3.0	14.3	13.5	2		2	27.0	8.4	18.4	2.0	0
	3	20.1	2.5	11.1	0.0	2		3	30.0	7.0	20.1	8.7	0
	月	23.1	3.9	13.7	13.5	4		月	30.3	8.9	20.2	83.9	0
6	1	20.5	1.0	11.4	11.6	3	12	1	33.0	9.0	22.5	13.5	0
	2	10.0	-3.0	8.1	9.6	1		2	37.9	13.4	24.6	0.0	0
	3	19.4	-6.0	6.4	0.0	4		3	32.5	16.8	24.7	30.5	0
	月	16.6	-2.6	8.6	21.2	8		月	34.4	13.0	23.9	44.0	0

気象

平均気温は日最高気温と日最低気温の平均より算出した

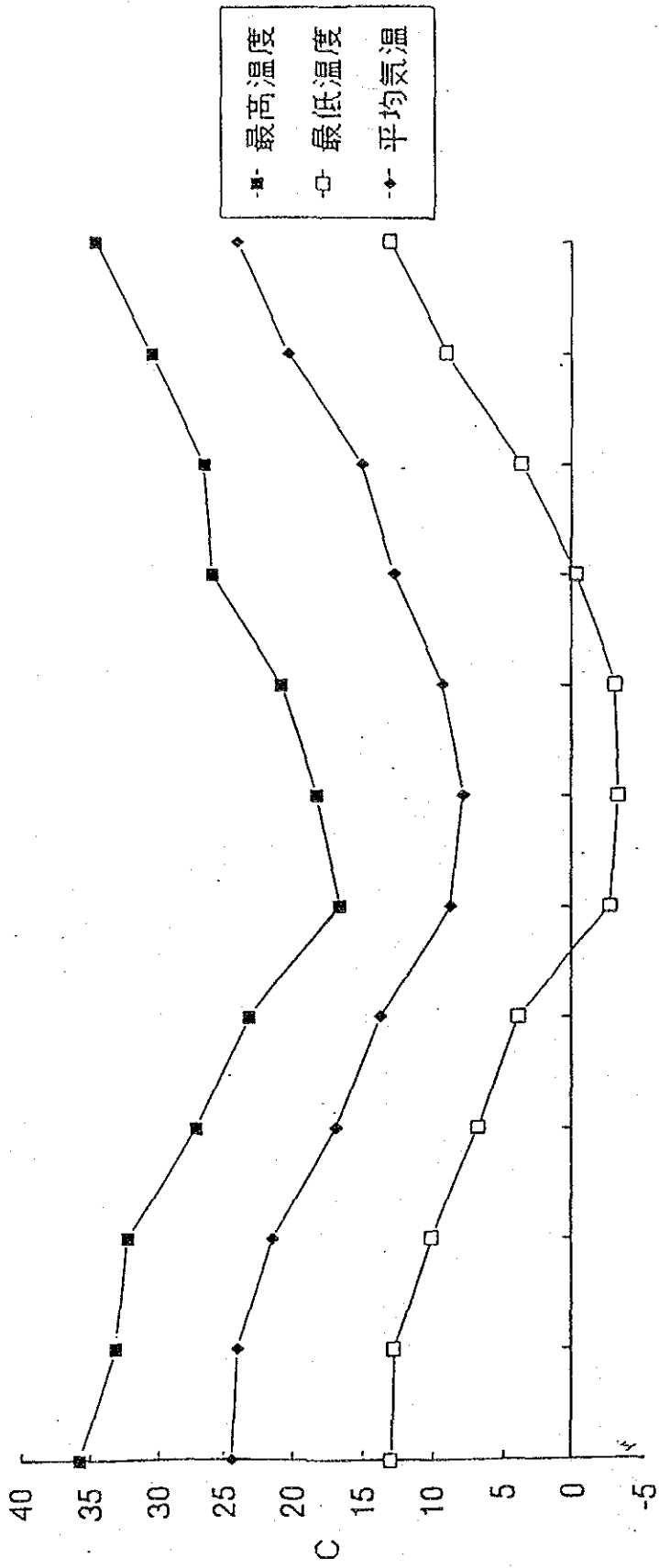
1995年気象データ（降水量）

観測地：バラデロー果樹園場



1995年気象データ（温度）

観測地：パラデーロ果樹園場



1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

研究目標： 花卉栽培体系の確立
 大課題： 病虫害防除対策技術の改善
 中課題： 病虫害防除に関する試験
 小課題： カーネーションの病虫害の診断と防除基準の検討
 試験項目： カーネーション病虫害の診断

1996年度（継続）

アゼンティン園芸総合試験場

担当者： 安井公一、森重ダニエル

目的	カーネーションに発生する病虫害の診断を行い、病虫害の防除基準作成のための基礎資料を得る。
試験方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 病気の診断： <ul style="list-style-type: none"> ・肉眼及び顕微鏡により症状および罹病名を調査する。 2. 害虫の診断： <ul style="list-style-type: none"> ・肉眼による。 3. 試験場所： <ul style="list-style-type: none"> ・栽培農家（数戸） 4. 試験期間： <ul style="list-style-type: none"> ・1996年4月—1997年3月

研究目標： 花卉栽培体系の確立
 大課題： その他の切り花の栽培技術改善
 小課題： 延命剤の効果試験
 試験項目： ポスト・ハーベストに関する試験

1996年度 (継続)

アルゼンティン 園芸 総合 試験 場

担当者： 安井公一、森重ダニエル、生駒エクトル

目的	切り花の市場価値を高めるためには、延命剤の使用が一つの方法である。しかしながら、未だ基礎データが無いので、その効果試験を行う。
試験方法	<p>1. 実施場所： アルゼンティン園芸総合試験場および委託試験</p> <p>2. 供試種類： ショコカスミソリ、ショコアスター、その他</p> <p>3. 供試延命剤： (商品名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリザール AVB ・クリザール SGVB ・コートフレッシュ K-20C ・アルギル ・その他 <p>4. 調査項目：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・処理時間 ・処理剤濃度 ・日持ち日数 ・その他

研究目標： 花卉栽培体系の確立

大課題： 栽培技術改善

中課題： 開花調節と作型開発に関する試験

小課題： 種子系ワージアの播種期試験

1996年度

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者： 安井公一、森重クニユキ

目的	<p>亜国では最近種子系ワージアの栽培が増え、播種時期によって不開花とか切花の品質低下などをおこしている。</p> <p>そこで播種時期と開花時期、および切花の品質との関係を見るためこの試験を行う。</p>
試験方法	<ol style="list-style-type: none">1. 供試場所： アルゼンティン園芸総合試験場2. 試験時期： 1996年2月～1997年3月3. 調査項目： 播種期、発芽期、開花期、切花品質、その他

研究目標： 花卉栽培体系の確立
 大課題： 病虫害防除対策技術の改善
 中課題： 病虫害防除に関する試験
 小課題： 木の病虫害の診断と防除基準の検討

1996年度（継続）

アビントイン園芸総合試験場

担当者：安井公一、森重ダニエル

目的	<p>木に発生する病虫害の診断を行い、病虫害の防除基準作成のための基礎資料を得る。</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 病気の診断： <ul style="list-style-type: none"> ・肉眼及び顕微鏡により症状および罹病名を調査する。 2. 害虫の診断： <ul style="list-style-type: none"> ・肉眼による診断。 3. 試験場所： <ul style="list-style-type: none"> ・栽培農家（数戸） 4. 試験期間： <ul style="list-style-type: none"> ・1996年3月—1997年2月

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：病虫害防除対策技術の改善

中課題：主要野菜の病虫害防除対策

小課題：キュウリの耐病性台木試験

試験項目：キュウリの台木及び接木試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間アルティン、生駒エトル

目的	<p>キュウリを施設の中で連作していると、立枯病 (Fusarium Solani) に冒され、根腐れをおこすと共に収穫物は品質が悪化し、減収も著しく、栽培農家の大きな問題点となっている。</p> <p>この病気を避けるには、耐病性を有する台木に接ぎ木すると、ある程度は抑制出来るとの見通しがある。そのため当国内で得られるキュウリ用台木を3種類使用した栽培試験と、併せて接ぎ木方法の栽培試験を行なう。</p>
試験方法	<p>1. 供試品種： 台木：(1) Tetsukabuto (2) F₁ Sheiiper (Takii Seed) (3) F₁ Kirameki (Takii Seed) 栽培品種：Southern Delight (Takii Seed)</p> <p>2. 試験期間： 1995年12月~1996年4月</p> <p>3. 試験方法： (1) 播種：1995年12月17日、8cmのプラスチック鉢に播種 (2) 接ぎ木：1995年12月29日に寄せ接ぎを行ない、直後50ミクロンのポリエチレンを被覆して湿度を100%に保つ。 (3) 定植：1996年1月8日試験場の施設内へ定植して寒冷紗50%で被覆する (4) 栽植密度：畦幅1.20m、株間0.70m、1条植え 施肥量：N:P:K 18:46:0 温室6X40m 当たり3.6kg (5) 収穫期間：1996年2月下旬~1996年4月 (6) 処理区： a. F₁Kirameki + Southern Delight b. F₁Sheiipar + Southern Delight c. Tetsukabuto + Southern Delight 対照区 d. Southern Delight</p> <p>4. 試験場所：当試験場 カステラル 本場</p>

研究課題：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：栽培技術改善

中課題：セル成型苗システムの導入による栽培試験

小課題：育苗試験

試験項目：レタスの作型及び作付体系試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間マルティン、生駒エトル

目 的	<p>露地のレタス栽培は近代化が遅れていて、現状では年間3～4回播種機で条播する例もあるが、手播きでばら播きする農家が一般的である。これらの問題を解決するため、温度の影響が一番大きい育苗の時期に、ポリハウス下で高温を避けながらセル成型苗を作り、これを利用して作型体系の拡大及び作付体系を確立するための資料を得る。</p>
試 験 方 法	<p>1. 供試品種： (1) Crimor INTA (夏季) (2) Gallega de Invierno (冬季) (農家使用品種)</p> <p>2. 試験期間： 1996年2月～1997年2月</p> <p>3. 試験方法： (1) 播種：1996年3月15日セル成型箱へ播種 以降1ヶ月毎に播種 (2) 定植：1996年4月10日露地へ定植 以降1ヶ月毎に1回定植 (3) 栽植密度：畦幅0.60m、株間0.20X0.15m、千鳥植え (4) 施肥量：N:P:K 18:46:0 107-ル 当たり14kg (5) 処理区：1区当たり 6㎡ X 2列</p> <p>4. 調査項目：生育状況、花芽分化、収量、品質</p> <p>5. 試験場所：当試験場 カステラル 本場</p>

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立
 大課題：栽培技術改善
 中課題：セル成型システムの導入による栽培試験
 小課題：育苗試験
 試験項目：ブロッコリーの作型及び品種適応試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間マサヒコ、生駒イクトル

目的	<p>ブロッコリーの出荷期を拡大する目的で、7月～12月まで1ヶ月間おきにセル成型箱へ播種を行ない、40日間セル内で育苗させた苗を1ヶ月間おきに定植して栽培の難易性と収穫期を検討する。</p>
試験方法	<p>1. 供試品種： Premium Crop (Takii), Shogun (Sakata) (農家使用品種)</p> <p>2. 実施期間： 1996年2月～1996年12月</p> <p>3. 試験方法： (1) 播種：1996年7月1日セル成型箱へ播種 以降1ヶ月毎に1回 (2) 定植：1996年3月10日露地へ定植 以降1ヶ月毎に1回 (3) 栽植密度：畦幅0.60m、株間0.50m (4) 施肥量：N:P:K 18:46:00 化成肥料 107-ル 当たり14kg (5) 処理区：一区当たり10㎡X 2列</p> <p>4. 調査項目：生育状況、花芽分化期、収量、品質</p> <p>5. 試験場所：当試験場 カステラル 本場</p>

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：栽培技術改善

中課題：セル成型苗システムの導入による栽培試験

小課題：育苗試験

試験項目：カリフラワーの作型及び品種適応試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間アルティ、生駒エトル

目	カリフラワーの出荷期を拡大する目的で、7月～12月まで1ヶ月間おきにセル成型箱へ播種を行ない、40日間セル内で育苗させた苗を1ヶ月間おきに定植して栽培の難易性と収穫期を検討する。
試験方法	1. 供試品種： Snow Crown(Takii), Snow March(Takii) (農家使用品種) 2. 実施期間： 1996年2月~1996年12月 3. 試験方法： (1) 播種：1996年7月1日セル成型箱へ播種 以降1ヶ月毎に1回 (2) 定植：1996年3月10日露地へ定植 以降1ヶ月毎に1回 (3) 栽植密度：畦幅0.60m、株間0.40m (4) 施肥量：N:P:K 18:46:00 化成肥料 107-ℓ 当たり14kg (5) 収穫期間：1996年9月下旬~1997年2月 (6) 処理区：一区当たり10㎡ X 2列 4. 調査項目：生育状況、花芽分化期、収量、品質 5. 試験場所：当試験場 カステラル 本場

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：栽培技術改善

中課題：セル成型苗システムの導入による栽培試験

小課題：育苗試験

試験項目：キャベツの作型及び品種適応試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間マサヒコ、生駒エトル

目的	キャベツの出荷期を拡大するに当たり、7月～12月まで1ヶ月間毎にセル成型箱へ播種を行ない、40日間セル内で育苗させた苗を1ヶ月間おきに定植して栽培の難易性と収穫期を検討する。
試験方法	<ol style="list-style-type: none">1. 供試品種： Green Coronet (Takii), Gloria (Sakata) (農家使用品種)2. 実施期間： 1996年2月～1996年12月3. 試験方法：<ol style="list-style-type: none">(1) 播種：1996年7月1日セル成型箱へ播種 以降1ヶ月毎に1回(2) 定植：1996年3月10日露地へ定植 以降1ヶ月毎に1回(3) 栽植密度：畦幅0.60m、株間0.50m 施肥量：N:P:K 18:46:00化成肥料 107-ル当たり14kg(4) 処理区：一区当たり10㎡×2列4. 調査項目：生育状況、花芽分化期、収量、品質5. 試験場所：当試験場 カステラル 本場

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：栽培技術改善

中課題：セル成型苗システムの導入による栽培試験

小課題：育苗試験

試験項目：十字花科植物のセル成型苗育苗試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間マサヒコ、生駒エクトル

目的	現在も野菜苗の苗作りは10～15年前と同じ方法で露地へばら播きしてポリエチレンで被覆する方法を続けている農家が多い。そこで新しい方法のセル成型による育苗を農家に普及するため、十字花科野菜について床土の試験を行なう。
試験方法	<p>1. 供試作物： キヤバツ : Green Coronet (Takii), Gloria (Sakata) フロッキー: Premium Crop (Takii), Shogun (Sakata) カリフラワー: Snow Crown, Snow March (Takii)</p> <p>2. 実施期間： 1996年7月～1996年9月</p> <p>3. 試験方法： 試験Ⅰ 1996年7月1日 セル成型箱へ播種 床土 a. 畑土100% " b. 畑土60% + ピートモス40% " c. 畑土20% + ピートモス80% " d. 畑土10% + ピートモス50% + パーライト40% " e. 畑土 0% + ピートモス70% + パーミキュライト30%</p> <p> 試験Ⅱ 1996年7月15日 セル成型箱へ播種 床土 a. 畑土15% + 刈炭85% " b. 畑土15% + 刈炭70% + パーミキュライト15% " c. 畑土15% + 刈炭25% + ピートモス60% " d. 畑土10% + 刈炭20% + ピートモス40% + パーミキュライト30% " e. 畑土 0% + パーライト20% + ピートモス60% + パーミキュライト20%</p> <p>4. 調査項目： (1) 発芽日 (2) 生育状況 (3) 草姿 (4) 品質</p> <p>5. 試験場所：当試験場 カステラル 本場</p>

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：栽培施設・資材の検討

中課題：新作型の開発

小課題：レタスの作型開発

試験項目：夏季におけるレタスの栽培試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間アルティン、生駒エクトル

目	夏季におけるレタス栽培は、高温および強日射が影響して生育中に花芽分化を起こすため生産性が落ちる。これを避けるため、寒冷紗等の被覆資材を使用することによって温度と射光量を抑え、その結果抽台が遅れるか否かを調査し、併せて被覆資材の有効性を実証する。
試験方法	<p>1. 供試品種： Crimor INTA</p> <p>2. 試験期間： 1996年1月~1996年2月</p> <p>3. 試験方法： (1) 播種：1995年12月16日グレウ市の野菜農家でセル箱へ播種 (2) 定植：1996年1月12日当試験場の施設内へ定植 (3) 栽植密度：畦幅0.70m、株間15cmX5cm、千鳥植え 施肥量：N:P:K 18:46:0 107-㎡当たり14kg (4) 収穫期間：1996年2月下旬 (5) 処理区：定植直後に次の材料で被覆した。 a.寒冷紗（遮光率50%） b.アルミスクリーン（遮光率50%） c.対照区 (6) 灌水は点滴灌水とした。</p> <p>4. 試験場所：当試験場 カステラル本場</p>

研究目標：優良品質野菜の集約的栽培体系の確立

大課題：栽培施設・資材の検討

中課題：新作型の開発

小課題：イチゴの作型開発

試験項目：イチゴ「とよのか」の作型体系試験

アルゼンティン 園芸総合試験場

1996年度

担当者：仲間マサヒ、生駒エトル

目	冬季に亜国の野菜中央市場で見られるイチゴはコロンビア、エクアドルなどからの輸入物が多く、国内産が見当たらない。そこで、休眠の浅い「とよのか」を用いて冬季での早期出荷の可能性を検討する。
試験方法	<p>1. 供試品種： とよのか</p> <p>2. 試験期間： 1996年 2月~1996年 9月</p> <p>3. 試験方法： (1) 親苗定植日：1996年 1月22日 (2) 子苗掘り：1996年 4月 (3) 定植日：1996年 4月 (4) 栽植密度：畦幅0.80m、株間0.26x0.13m、2条千鳥植え (5) 電照：18:00hrs~23:00hrs の間、1時間毎に10分間照明。 (6) 施肥量： N:P:K 18:46:0 化成肥料 107-ℓ当たり14kg (7) 収穫期間：1996年 7月上旬~1996年 10月</p> <p>4. 調査項目： 生育状況、花芽分化期、収量、品質</p> <p>5. 試験場所：当試験場 カステラル 本場</p>

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立

大課題：新規導入果樹の栽培技術改善

中課題：結実に関する試験

小課題：樹勢制御試験

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲、イグレス・インサロ

1996年度

目的	栄養生長の盛んなウメの若木に対し樹勢を抑制し、開花結実を促進させるため、徒長枝処理の方法及び主幹を針金で絞める主幹括約試験を前年度に引き続き実施し、その効果を調査する。
試験方法	実施場所：バラデーロ果樹圃場 供試品種：鶯宿、玉英、白加賀、南高。 調査時期：満開期、果実結実期、果実肥大期、収穫期。 調査項目：果実重、高径、横径、糖度、酸度。

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立
 大課題：新規導入果樹の栽培技術改善
 中課題：栽培密度に関する試験
 小課題：密植栽培試験

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲、イグナシオ・インサロ

1996年度

目的	<p>栽植距離の相違が樹体の生育と果実収量、品質に及ぼす影響について調査する。</p>																								
試験方法	<p>実施場所：バラデーロ果樹圃場 供試種類：リンゴ、モモ、ナシ、ブドウ、ウメ、カキ、ミカン。 栽植距離を変えた上記果樹の疎植園と密植園（☆）を対象に、樹体の生育と果実の収量、果実の大きさ、果汁の糖、酸含量を測定する。 調査時期：満開期、果実結実期、果実肥大期、収穫期。 調査項目：果実の重量、高径、横径、糖度、酸度。</p>																								
法	<p>（☆）疎植園と密植園の植付密度（本/Ha）</p> <table border="1" data-bbox="587 1440 1348 1818"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>リンゴ</th> <th>モモ</th> <th>ナシ</th> <th>ブドウ</th> <th>ウメ</th> <th>カキ</th> <th>ミカン</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>疎植園</td> <td>112</td> <td>290</td> <td>198</td> <td>155</td> <td>289</td> <td>303</td> <td>441</td> </tr> <tr> <td>密植園</td> <td>1000</td> <td>500</td> <td>364</td> <td>279</td> <td>533</td> <td>546</td> <td>831</td> </tr> </tbody> </table>	区分	リンゴ	モモ	ナシ	ブドウ	ウメ	カキ	ミカン	疎植園	112	290	198	155	289	303	441	密植園	1000	500	364	279	533	546	831
区分	リンゴ	モモ	ナシ	ブドウ	ウメ	カキ	ミカン																		
疎植園	112	290	198	155	289	303	441																		
密植園	1000	500	364	279	533	546	831																		

研究目標：果樹の栽培技術体系の確立

大課題：新規導入果樹の栽培技術改善

中課題：品種適応試験

小課題：当初導入果樹8種類の品種適応試験

アルゼンティン園芸総合試験場

担当者：樽谷政憲、イグナシオ・インサロ

1996年度

目的	日本より導入した11種類の果樹の中で結実樹齢に達した8種類の果樹の品種別収量と品質について調査し、品種の地域適応性について検討する。
試験方法	実施場所：バラデーロ果樹圃場 供試種類：ニホンナシ、ウメ、モモ、ブドウ、ウンシュウミカン、カキ、リンゴ、ビワ。 調査時期：満開期、果実結実期、果実肥大期、収穫期。 調査項目：果実重、高径、横径、糖度、酸度。

LIB